コラム 5-2　幼児期健忘とエディプス・コンプレックス

幼児期以前の体験（記憶）を，大人になってから思い出すことができないことは，以前から知られており，「幼児期健忘」と呼ばれていました。この現象について，面白い理由を考えたのが，精神分析の創始者フロイトで，彼は，ソフォクレスのギリシア悲劇のストーリーにヒントを得て「エディプス・コンプレックス」と名づけました。ソフォクレスの悲劇「エディプス王」のストーリーとは，次のようなものです。

エディプスの両親は，テーバイの王ライオスと王妃イオカステで，彼らに子どもができたとき，ライオス王は「お前の子はお前を殺し，お前の妻との間に子をなす」との恐ろしい神託を受けます。そのため，神託が実現することを恐れたライオス王は，従者に命じて生まれた子どもを殺すように命じますが，預けられた従者は命令に背き，その子を殺さずに山に置き去りにしてしまいます。その子は隣国のコリントス王夫妻に拾われ，子どもがいなかった国王夫妻に息子として育てられて，エディプスと名付けられ，立派に成長します。しかし，エディプスは，成長後，周囲の人から「王の実子ではない」という噂を聞き，神に伺いを立てることにします。その結果，エディプスに与えられた神託は，ライオス王に与えられたものと同じ「おまえは父を殺し母と結ばれる」というものでした。彼は，この神託が自分と実の親と思っていたコリントス王夫妻の事を指しているのだと誤解し，父であるはずの王を殺さないために，国を離れることにしました。

その頃テーバイでは，近隣にスフィンクスという怪物が出現，国に災いをもたらします。これに対処するため，ライオス王は神託を得ようと周囲の者とデルポイ（神託を受ける場所）に出かけますが，その途中でエディプスと出会い，行き違いから争いとなり，エディプスは彼らの名も知らぬままに殺してしまいます（神託の 1 つめの父親殺しが成就）。その後エディプスは，スフィンクスと対決し，これを打ち倒します。

テーバイでは王の旅先での不慮の死に混乱していましたが，国に災いをもたらしていた怪物スフィンクスを倒した若者を歓迎し，先王のあとを彼に継がせ，ライオス王の妻イオカステを彼にめあわせました。2 人の間には，男女それぞれ 2 人ずつ子が生まれましたが（これでエディプスが知らないうちに母と交わり子をもうけるという 2 つめの神託が実現しました），テーバイには疫病が流行しはじめます。その原因を調べ，先王ライオスの殺人犯が捕らえられていないためであるという神託を得たエディプスは，部下に前王の殺害事件を調べて殺人犯を捜すよう命じます。しかし，その結果明らかになったことは，犯人は自分自身であるという事実でした。エディプスは，真犯人が自分であり，しかも自分が実の母と交わって子をもうけていたという真実を知った結果，自ら目を潰し，国を去ってさすらいの旅に出ます。このように，原作の悲劇は，ラストに大どんでん返しが待っており，世界最古のミステリーともいえるものです。

フロイトの「エディプス・コンプレックス」は，ソフォクレスの悲劇のストーリーの中心にある「父親殺し」と「母親との近親相姦」をベースにした概念で，男の子が父親に反抗し，母親に愛着を示す心理傾向のことを，エディプス願望と呼び，この父親への敵意，母親への

愛着を発達過程で抑圧する（無意識化する）こと（エディプス・コンプエックス）が，神経症の一因であると考えました。そして，幼児期健忘（幼児期の記憶を想起できないこと）の原因は，エディプス的願望を抑圧するために，幼児期に抱いた反社会的な願望を意識から排除するためだと主張しました。

もちろん，このような主張には科学的･実証的な根拠はなく，単にちょうど似た話を見つけてきて，もっともらしく説明しているだけに過ぎません。だいたい，当時の神経症患者とされた人の大半は女性であり，エディプス･コンプレックスは男性にしかあてはまらないので，説明として不十分です。

近年の認知心理学的な研究によって，幼児期健忘は，自己概念が形成される前と後では，自分の記憶を体制化する方法が変わるために，自己を対象化して記憶する以前（幼児期以前）のことは，ほとんど思い出せないということがわかりました。これはいわば，コンピュータの OS を変えたために，以前のメモリーにアクセスできなくなってしまったことと同じであり，ギリシア神話とは何の関係もありません。